人生と愛　　エーリッヒ・フロム著

　　　　　　佐野哲郎　佐野五郎訳　　1986年　紀伊国屋書店　報告　松本倫明

~私たちの社会の過剰と倦怠~

————受動的人間————

語義

過剰と倦怠について論じるにあたって、その語義を明らかにする。

過剰は、「絶対的に必要なものを超えること(P7)」を表す。これは肯定的には「溢れ出る」ことだが、否定的には無益、無駄、「余分」という意味である。

次に倦怠或は不快とは、退屈、不機嫌を引き起こすものである。

ここで悪い意味の過剰と倦怠は関わり合っていることが解る。そして私たちが吟味しなければならないのは、我々が過剰の中に生きているのではないか、ということである。

消費人

フロムは新たに消費人という用語を出す。その意味する所は、自分の内に空虚感、不安を抱き、それを忘れる為に消費せざるを得ない、受動的な人間である。

受動と能動

ここで受動、能動の意味も明らかにしなければならない。現代的には、能動は「目に見える効果のある行為(P17)」、受動は「無目的のように見え、エネルギーの使用が認められない態度(P18)」を指す。

然し消費人の観点からいえば、悪い過剰(「浪費」と解釈)をうむ能動は結局、無目的な受動なのである。一方、観照や瞑想のように「ただ<ある>ことに集中している[[1]](#footnote-1)」状態が積極的なのである。

————現代の退屈————

古典的能動

限りなく洞察を深め、成熟を高める力、愛と芸術的表現の力、これらは人間の中に潜在し実現されるべき力である。古典的な意味の能動とはこの力の具体化である。

現代の愛

然し現代社会において、能動は具体化されない。近代人は愛によって生み出すことよりも、愛されることばかりに腐心する。そうして生まれる愛情あるべき生活は、互いに騙し合う、或は騙されたと感じる様な、芝居の愛の実践である。

文化の退屈

我々の文化において、退屈が如何に苦痛であるか、認識されていないようである。人は酒、セックス、精神安定剤等の手段で退屈を紛らわそうとするが、実は時間の浪費を感じる。そして時間を惜しみ、節約したとしても、それによって生まれた余剰の時間の使い方が解らないのである。

————作られる欲求————

産業革命

産業革命は二度起こった。第一次では、機械が人間や動物の、乃ち自然の力に代った。それと同時に生物の力では限界があった過剰が全ての人間の為に生産されるようになった。

第二次では、更に人間の思考をも、機械が代用する。それは他の機械を制御する機械という形で現れる。

加えて、この経緯で生まれた近代社会は欲求さえも生産するようになった。人間の願望は本人から発するのではなく、広告等の外部の要因から生み出され、操られる。

消費の宗教

外部から作られる欲求は、消費の無制限な増大を導く。それは「逸楽郷の宗教」乃ち「気儘に消費し耽溺することが理想とされる価値観」とさえ言える。こうして「受動性が強まり、また、嫉妬や、貪欲が強まり、ついには内的な弱さの感覚、無力感、劣等感が増大[[2]](#footnote-2)する。人間は、自分が持つものとしてのみ生き、あるものとして生きないのである。(P38)」

————家父長制の危機————

父権性

家父長制社会での最高原理は国家、法律、抽象であり、家母長制社会では自然の絆である。また人間は自己の中に良心という形で父長的規範を内包する。

家父長制の崩壊

近代西洋において家父長制という伝統的関係は崩壊しつつある。それは過剰の問題と関わっている。

第一に、断念という考えが失われている。神や支配者が望む為に、断念し、服従する。然し過剰の増大の中では、有り余っているにも関わらず、断念する必要はなくなっている。

第二に新しい生産技術が挙げられる。近代の生産様式はグループの作業を要求し、上級——下級という区別は失われつつある。

第三に、服従からの解放を目指してきた政治革命や女性の地位を上げてきた女性革命がある。

最後に最も重要なのが、若者に対する社会の無能さの露見である。近代以降、科学は大いに発達し、月旅行まで囁かれる。然し、自殺は増加し、世界大戦は防げず、成功主義社会の長所の裏側には、最重要課題を処理する能力の欠如が伺える。

人は最早家父長制=権威主義社会の構造や働きを信じていないのである。

————宗教の行き詰まり————

新たな宗教

家父長制=権威主義構造の危機は宗教の危機を導く。最早従来の宗教は最高の価値を表現せず、信頼を失った。ここで新たな宗教、乃ち「技術の宗教」が発展した。

技術の宗教には二つの側面がある。それは逸楽、乃ち無限の欲求充足である。

第二に人間が神になろうとしていることである。人間は観察者であることを超え、生命を人工的に作り、宇宙へ旅立つようになった。

この新たな宗教の道徳規準はただ一つ、技術的に可能なことはやり遂げないということだけである。

新しい道徳の兆し

他方、若い世代において、新たな道徳原理が尊重され始めている。更に仏教は権威主義的基盤がない道徳原理のモデルである。不道徳は人間の調和と平衡を奪う。然し道徳的な行動をしたいという自己の内なるヒューマニズムの良心を失ってはならない。

————人間的成長の限界に抗して————

人間は過剰を追求するのではなく、自分の内的発展に何が必要なのか、考えなければならない。

~攻撃の発生源について~

1. エーリッヒ・フロム著、鈴木晶訳(1991)「愛するということ」紀伊国屋書店に詳しい [↑](#footnote-ref-1)
2. 持っていることが規準となる場合、その規準の達成には際限がなく、比較は劣等感へと繋がる。 [↑](#footnote-ref-2)